

# 知的障害者施設におけるコンピューターネットワークの利用について ——神奈川県藤沢市 社会福祉法人 藤沢育成会 における障害者・高齢者の コンピューターネットワーク利用の可能性——

白梅学園短期大学 福祉援助学科 堀江まゆみ

社会福祉法人 藤沢育成会 CN 委員会 古山 圭二 (管 理 部)

志賀 信道 (湘南セシリア)

坂本 昌行 (よし介工芸館)

安西 義美 (湘南あおぞら)

安西 未佳 (湘南ゆうき村)

押谷 敏明 (みらい社)

## 1. はじめに

障害者の地域生活を実現する上でのバリアについて、もり (1996) は、以下のような3つの視点を指摘している。第一には、車椅子で階段を昇降することができないといった「物理的な制約」、第二には視聴覚障害者の情報入手の困難性などに関わる「情報のやりとりに伴う制約」、第三に、障害に対する偏見や差別に類することからの「心理的制約」である。特に、障害者や高齢者がコミュニティや情報にアクセシブルであることをはじめとして、社会参加すべてにわたる基盤整備としてバリアフリーをとらえることの重要性が指摘されている (茂木、1997)。

近年の情報通信技術の発展は、障害者・高齢者においても地域とのコミュニケーションが広がる、あるいは在宅就労が可能となるなど、障害者の自立と社会参加の広がりや深くなり大きく貢献している。また個人や団体からインターネットを通して情報が盛んに発信される現代ではさまざまな情報機器に関して、障害者や高齢者の使い勝手や利用しやすいシステムの開発など、情報提供のあり方がさかんに議論されてきている。

しかしながら、障害者・高齢者にとって、日常の生活のなかでパソコンやインターネットなどの情報ツールが常に身近にあるかという、そうで

ない人々の方が圧倒的に多いというのが現実である。特に、入所施設の利用者であれば居住・生活空間としての制限もあり、あるいは生活環境としての必要性が低いという施設サービスの「一般的な認識」から、現実にはコンピューターそのものの接点がないことの方が多い。

「情報アクセスは現代の人権である」あるいは「情報バリアフリーの新世紀をむかえるため」(注1)の支援を考えた場合、どのような方法であるなら、障害者・高齢者の生活支援として、情報提供や情報機器活用が可能になるのであろうか。

ここでは、知的障害者施設を運営する社会福祉法人 藤沢育成会 (神奈川県藤沢市) における取り組みを紹介する。本法人では、数年前から施設内・施設間の業務有益性のために、あるいは職員の業務管理ツールとして、コンピューターおよびコンピューターネットワークを導入してきた。本論では、この数年の経過のなかで結果として、障害者・高齢者の施設利用者が日常生活のなかで職員とともに共同してコンピューターを使いだしたという実践例を報告する。職員の業務管理として導入したコンピューターを、職員の利用の空き時間や余暇時間などに知的障害をもつ施設利用者が日常的に使いだし、そのことによって障害者・高齢者自身の生活に趣味や生活の楽しみが生まれた事例、情報入手および情報伝達のツールとして使いだした事

例などである。このような事例を通して、利用者本位の視点から施設サービスとしてのコンピューターネットワークの活用を捉え直し、今後の可能性について考えることを目的とする。

## 2. 社会福祉法人藤沢育成会の成立過程と概要

社会福祉法人藤沢育成会（以下、藤沢育成会あるいは育成会）は、1962年藤沢に住む知的障害者の家族の間から芽生えた「手をつなぐ親の会」が母体となり、3ヶ所の地域作業所および生活ホームの開設と運営を経て、1988年「藤沢育成会」として法人格を得た。以来、今日までの間、藤沢市における知的障害者福祉の中心を本法人が担ってきた。図1は、1992年に「藤沢市を中心とした湘南地区に居住する障害児・者が、地域でその人らしく暮らしていける」ことを願って藤沢育成会が発表した「マスタープラン1」である。その後、このプランに示されている各施設がつぎつぎと開設され、現在では、藤沢市内に、生活施設2ヶ所

（湘南セシリア、湘南あおぞら）、通所施設・デイサービスセンター1ヶ所（湘南ゆうき村）、社会就労センター1ヶ所（みらい社）、地域活動センター2ヶ所（よし介工芸館、くろさき工芸館）、グループホーム3ヶ所、他に地域生活支援センター（サービスセンターぱる）、ともしびショップ3ヶ所が相互に連携しながら総合的な地域生活支援にあたっている。図2は、「湘南ゆうき村」デイサービスの一コマである。藤沢市内に住む身体障害者・高齢者が週2回程度利用し、湘南ゆうき村でのさまざまな活動やそれぞれ目的のある生活を楽しんでいる。

## 3. 藤沢育成会におけるコンピューターネットワークの成立経過と現状

ここでは、藤沢育成会のコンピューターネットワークの歴史や現状を報告するが、その前に、藤沢育成会 C N 委員会（Computer Network

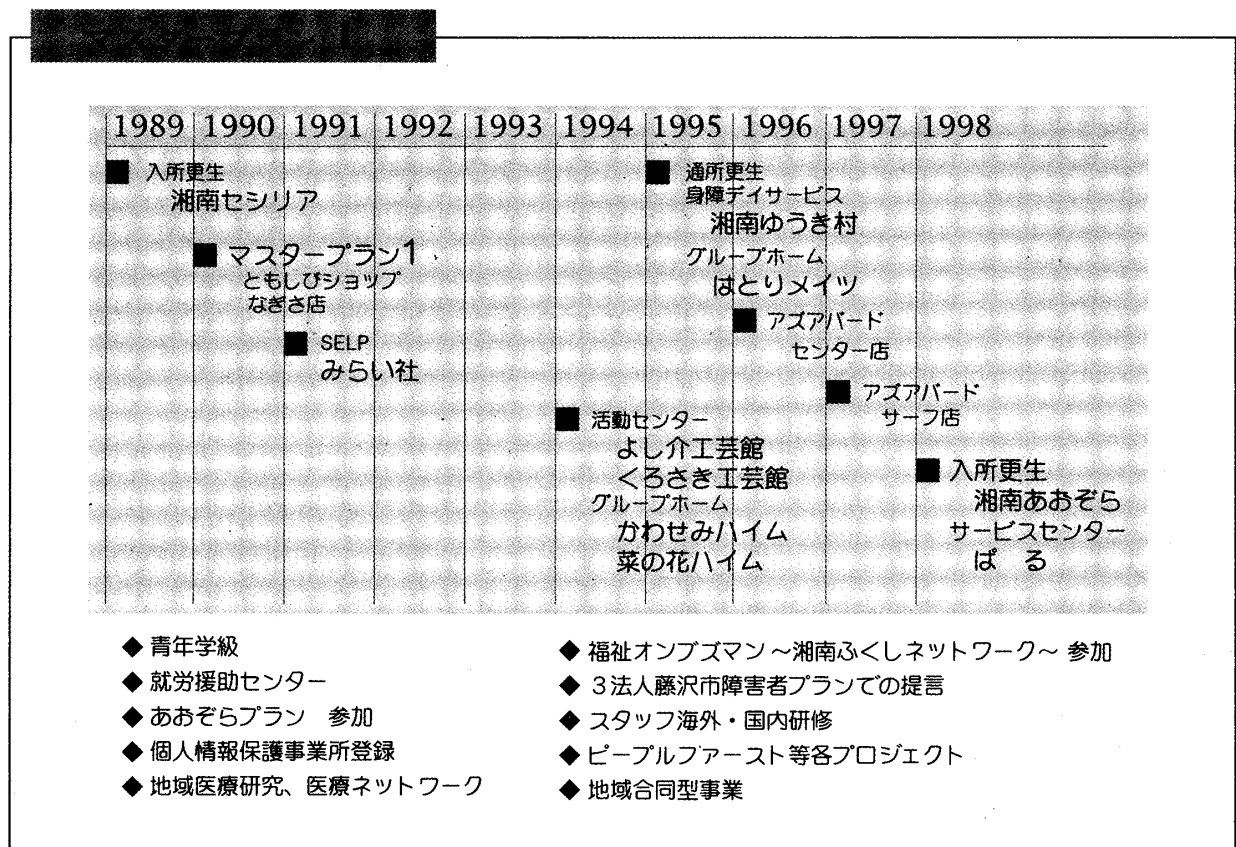


図1 藤沢育成会「マスタープラン1」

Commission、以下CN委員会)に触れておく。

### 1) 藤沢育成会CN委員会

現在、育成会の各施設には1台～数台のコンピューターが設置されているが、各施設毎の利用方法や職員の利用状況は、各施設が担っている福祉サービスの内容や活動、施設利用者の違いによってそれぞれに異なる。各施設内での活用方法や今後のコンピューター導入計画、およびトラブル等の技術的な援助など、各施設毎の対応や活動計画は、実際には藤沢育成会CN委員会のメンバーによって進められている。委員会のメンバーは法人内の主要な施設ごとに1名程度があたり(チーフ古山、各施設から1名、計6名)、職務後の時間を使って定期的な会合や学習会を開催している。ここでの話題は、技術的なトラブルの解決方法や職員の活用状況、施設利用者の楽しみ方などの情報交換が主であるが、報告される事例に

は、「職員も施設利用者もコンピューターを使いながら、日常の業務を便利に／日常の生活を楽しく」という趣旨が反映されている。これらのユニークな話題の中から今後の育成会ネットワークのあり方が探られていることになる。以下で使用する説明図は、このCN委員会の学習材料として作成されたものである(注2)。この会のモットーである「わかりやすく、ユニークに」がここにも映し出されている。

### 2) 藤沢育成会パソコンの歴史

図3は、藤沢育成会発足(昭和63年)から現在までのコンピューター導入の経過について、特徴ある時期毎に区分して示したものである。図右側には各時期に開設された施設が示されている。

法人設立当初は、作業所、「セシリア」、「みらい社」でコンピューターが使われていたが、この間の3年間は主に給与計算や栄養管理、施設会計

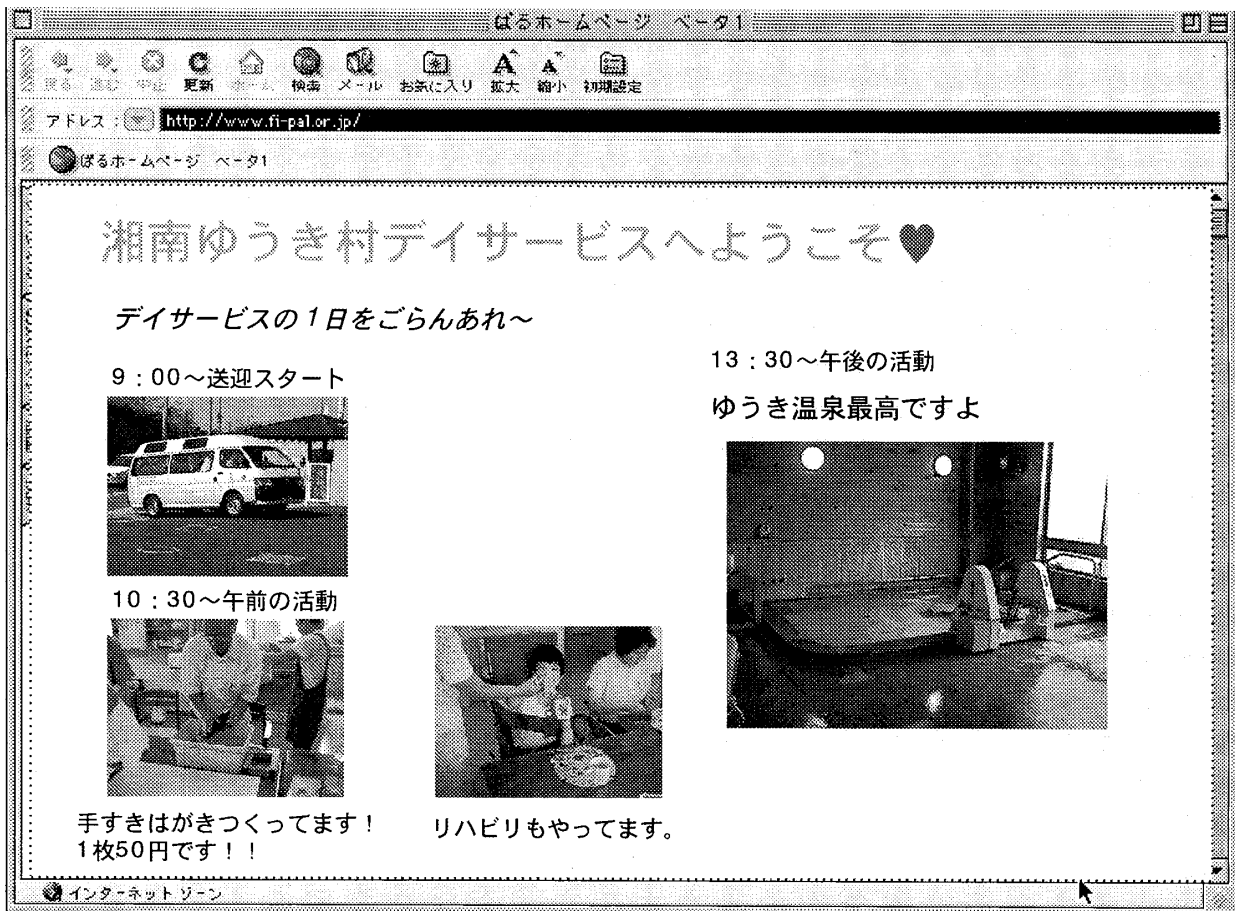


図2 藤沢育成会「湘南ゆうき村」デイサービスの活動  
:(ホームページ例)

などワープロ事務機としての利用が多かった（事務機器期）。清書マシンとして職員が自費を使って購入し使っていたというのが実状である。次の3年間は、個別に啓蒙したともいえる時期（個別啓蒙期）であり、それまでに使い始めていた人やここにきて関心を持ち始めた人にコンピューターの機能を説明したり設定して回るなどの時期であった。この間 DOS から WIN への変換などを主にアシストした。このような仕事の当たるのは主に夕方など勤務外の時間であった。

藤沢育成会のネットワーク化にとって「湘南ゆうき村」の開所が一つの大きな契機となった（ネットワーク期：モデル事業時代）。機種として、現在育成会ネットの主流となっている「Mac」を導入した時期でもある。最終的には「だれでも使えること、ネットワーク化することが施設利用者へのサービスにつながるもの」とした目的があり、

この利用目的に近いものが Mac であると考えたからである。この当時にすでに施設内に Mac が数台入っていたが、まずは援助する側の職員がコンピューターを通して相互にネットワークできることを目標とし、館内にケーブルを通し準備を進めた。この時のメイン目標は、職員が業務で使用するファイルを共有することであった。このため「湘南ゆうき村」内にサーバを置き、職員はクライアントになり、ネットワークを通しての業務処理が進められるようになった。今後の育成会ネットワークの一つのモデルがここでできてきたともいえる。

その後、各事業所で準備を進めた（ネットワーク普及事業時代）。この時期に「セシリア」が準備をはじめ、「みらい社」、「湘南ゆうき村」、「地域活動センター」がネットワークした。現在では各施設内で約6～7台のコンピューターがネット

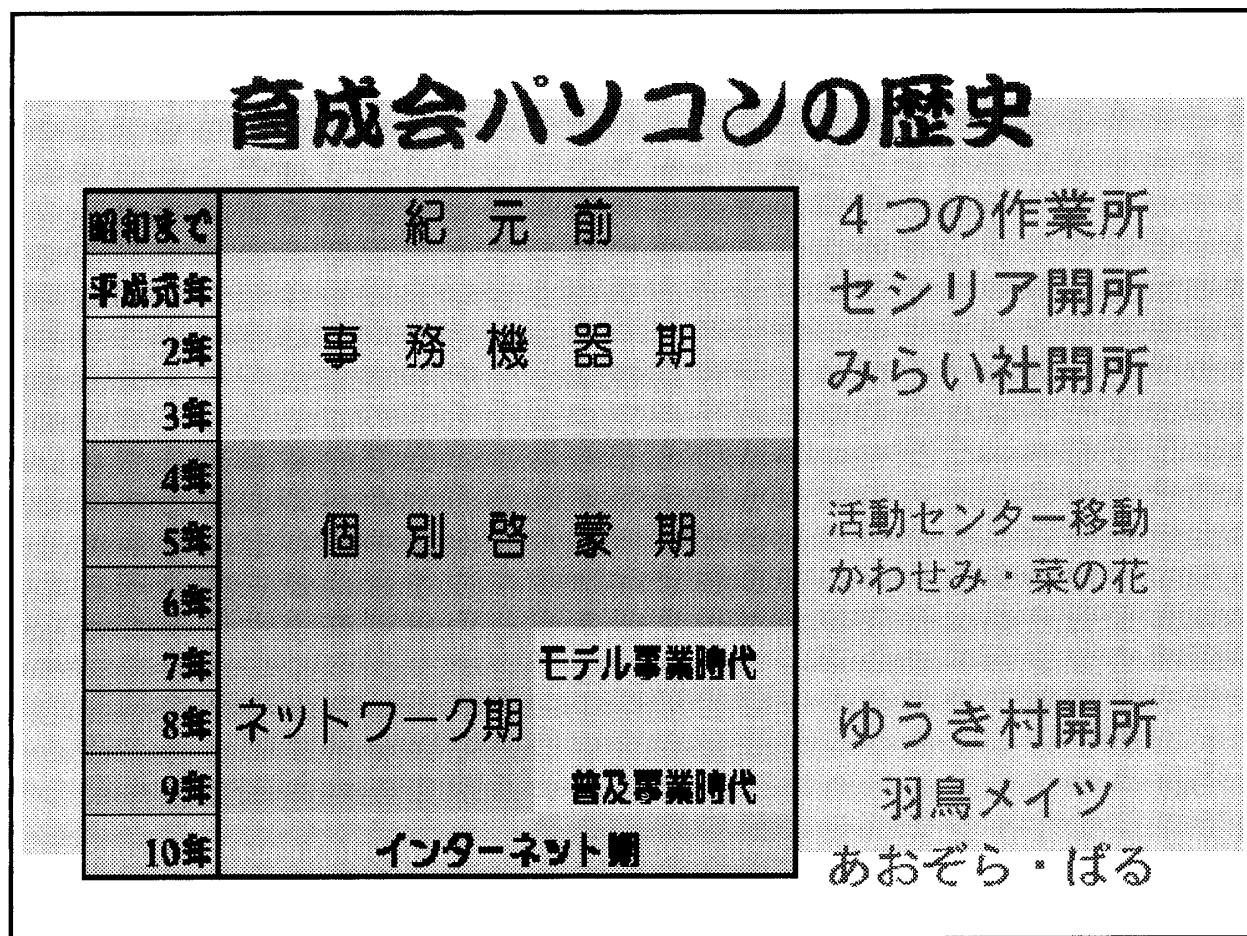


図3 藤沢育成会パソコンの歴史

ワークを組んで活用されている。また、少人数の居住場所であるグループホーム（「羽鳥メイツ」）にも1台設置しインターネットが常時利用できるようにしてある。まだグループホームからは他施設と具体的なやりとりは行っていないが、今後の活動としてグループホームにおいても、ネットワークの活用を考えており、その準備として世話人さんが使用し始めているところである。

図4は、この10年間における育成会のコンピュータ台数と職員の利用者数の推移を示したのが図4である。平成6年頃までの「個別啓蒙期」までは台数と利用人数がほぼ同数であるが、平成7年の「ネットワークのモデル事業時代」を契機に台数の増加とともに利用職員数が飛躍的に増加していたことがわかる。職員が個人の道具としてきた時代から、皆で共有し業務に活用していった経過がここにもみえる。現在、コンピュータ台数は育成会全体で50台程度、職員も100人近くが利用

していることになる。職員数は現在、非常勤職員も入れて育成会全体で160人程度であるのでこの数は半数以上となる。特に施設管理者や常勤の援助職のほとんどが使えるという現在の環境は、実は、施設利用者である障害者や高齢者にとって「より身近なところにコンピュータ利用のための有用な援助者が存在し始めた」ことを意味しているのである。

### 3)現在の藤沢育成会コンピュータネットワーク

図5は、現在の藤沢育成会コンピュータネットワークマップである。「湘南あおぞら」にインターネットサーバー、メールサーバーが置かれ常時受信できるようにしてある。藤沢市内の各施設との間はISDN回線を通してインターネット上でネットワークを組んでいる。現在は各施設間ではE-mail利用を中心としたネットワーク利用が主であるが、CN委員会では今後、藤沢育成会ホー

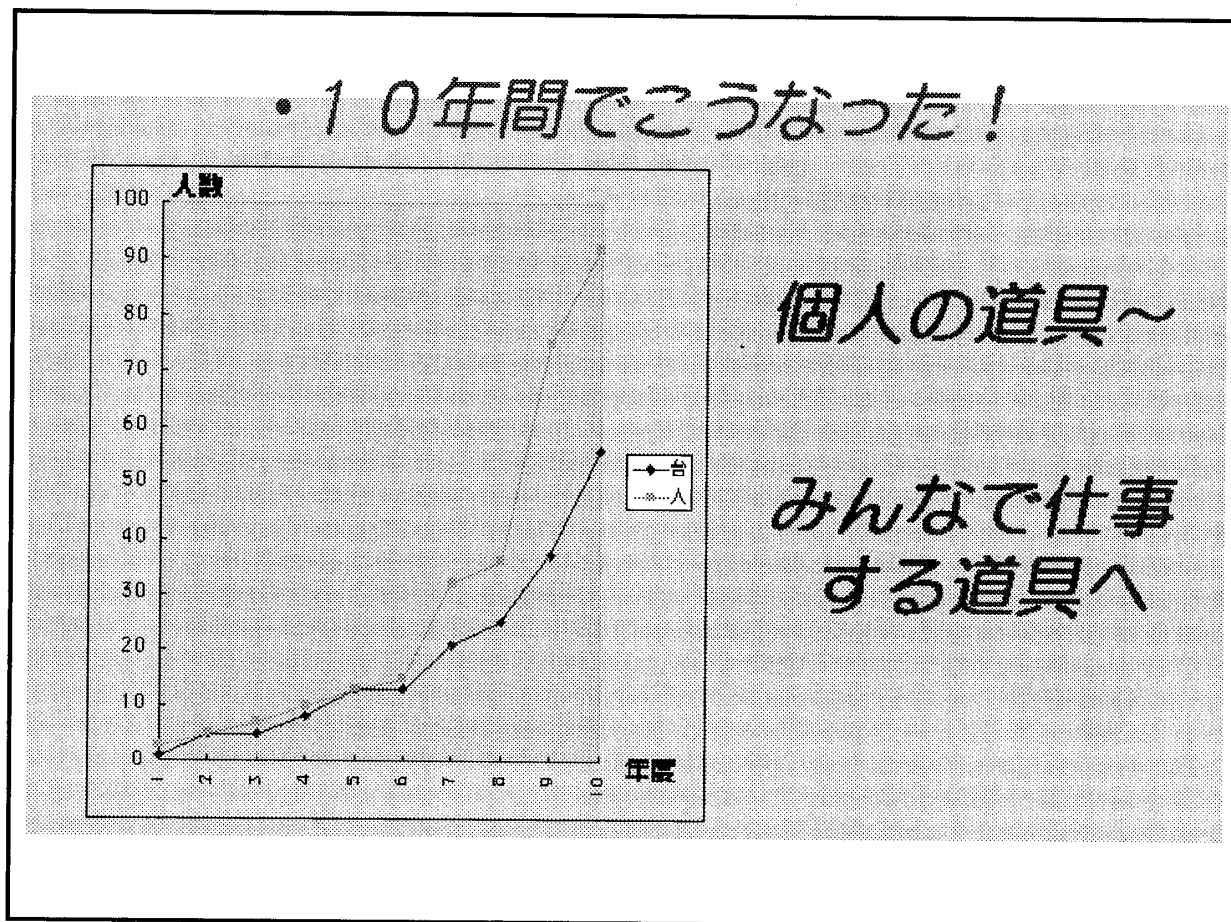


図4 藤沢育成会のコンピュータ台数および利用職員数の推移

ムページを充実させホームページ上でのネットワークを強化していきたいと考えている。その活用方向は育成会の「広報活動」としてではなく、「職員の業務の利便性をはかるために必要情報のリンクをはる」、あるいは「施設利用者の生活支援を充実させるための地域情報を収集し提供する場とする」というように、究極的には施設サービスの充実をはかり地域の障害者・高齢者本位の利用や生活支援のために効果的に運用されることを模索している。限定的でありながらも有益性の高いホームページやネットワークの開発に今後のねらいがある。このため、図中に見るように各施設をつなぐネットワーク体制の中心として「地域生活支援サービスセンター ぱる」が置かれている。これは同センターが今後地域の情報発信源の Key Station として機能していくことになるからである。

4) 藤沢育成会コンピュータネットワークが目

指すもの

図6は、藤沢育成会コンピュータネットワークが目指すものについて示したものである。「そもそも障害者施設にコンピュータネットワークなんてほんとに必要なの?」。コンピュータが普及し障害者に対する情報提供が重要だという認識では一致してきた現在であっても、福祉施設に「決して少なくはない」経費をかけコンピュータを導入する必要があるのかという議論は必ず出てくるものである。

では、藤沢育成会のコンピュータネットワークが目指すのは何であるのか。藤沢育成会CN委員会はこれまでの10年間の経過と実績をふまえて以下のようにとら、次の活動を生み出そうとしている。

まず、一つに「Work」。施設管理のための事務作業は年間を通じて膨大な資料と向き合うことになる。この管理業務のために援助職員であっても

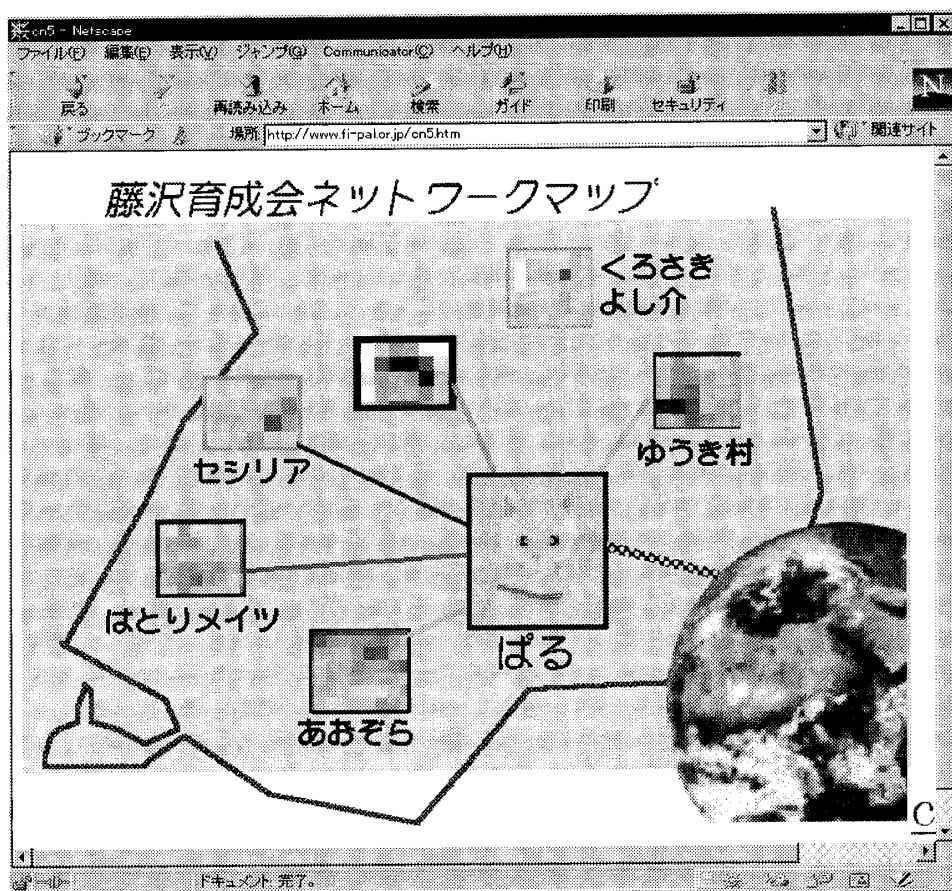


図5 藤沢育成会ネットワークマップ

勤務時間の一部がこの業務に当てられているのが実際である。あるいはこの業務のために「施設利用者をみずに机を向いて仕事している」実態があるのも否定できない。施設サービス提供者としての本務は、利用者本位のサービス提供にあるのは疑いもないことであり、このためには必要な施設管理業務の簡略化が求められている。コンピューターはそもそもこのような作業に適したツールであり、これを活用することがまず第1の目的であろう。現在、育成会ネットワークでは各施設にメインサーバーをおき（例えば、「湘南あおぞら」は“〇〇サーバー”、「湘南ゆうき村」は“△△サーバー”など固有の名称をつけている）、各施設内のどのコンピューターを立ち上げても同じ画面とサーバー、および共有されたファイル管理のシステムが得られる状態になっている。つまり施設内で「どこでも同じ仕事ができる、同じ環境でできる、みんないっしょに同じファイル・データを共有できること」がメリットとなっている。今後は、施設間あるいは法人内でのデータの共有化をはかり、煩雑な文書類のフォーマットを統一したりファイルやデータの共有や交換をより簡便にすることを目指している。

次に「Creation」。必要な管理業務を簡略化した分の時間と発想を、今後の法人・施設の創造的なエネルギーに向けていきたいと願うねらいである。ここには「利用者主体のサービスの視点」が存在しなければならないのは当然である。「利用者の地域生活を支援するため」に情報収集や発信をどう進めるか、地域の在宅障害者にむけた施設サービスの効果的なプレゼンテーションはどうあったらいいか、地域コミュニティとの連携を充実させるためのイベントはなにがよいのか。あるいは“旅行にいきたい”というような「利用者の活動を支援する」ためのツールとしてどのような活用方法があり得るか、などがこれにあたる。昨今の社会福祉基礎構造改革の動きもまさに施設サービスの多様化、公開化を目指したものであり、我々施設関係者が今後、フルに論議しなければな

マックでなにを  
するんですか  
**Work**

- 会計処理
- 給与計算
- 施設日誌
- 夜間報告
- 会議報告
- 出張・研修報告
- ディサービス月報

業務に追われる職員が

で、なにすんの？  
これからのアグレッシブなスタッフが

**Creation**

- 企画書づくり
- ミーティング
- 情報収集・発信
- プレゼンテーション
- イベントの創作
- パンフレット、新聞づくり

だからなにすんじゃい

**Collaboration**

- インターネット
- ホームページ
- 電子メール
- グラフィックアート
- イベントディスプレイ
- ゲーム

そして、利用者とともに

あ。そういこと。

**WORK**  
業務省力の  
道具に

**COLLABORATION**  
コミュニケーション  
エンパワーメント

- の道具に
- 
- 

**CREATION**  
育成会スタッフとして  
- 地域生活をつくっていく専門家としての武器に

図6 藤沢育成会コンピュータ・ネットワークが利用目指すもの

らない重要な点でもある。この点に関しては、1999年6月から始まる「サービスセンターばる」のサービス新体制をもとに、さらに積み上げられるものと期待される場所である。

これまでの視点は主に施設側、職員が利用する場合のねらいであったが、第三にあげられているのが「Collaboration」である。援助者としての職員と一施設利用者としての障害者・高齢者がともに協力、共同してネットワークを利用していくことが実は藤沢育成会CN委員会の究極のねらいかもしれない。もちろん、障害者・高齢者自身が施設サービスを利用しながら社会参加しその経過のなかでエンパワメントし社会的自律を得ていくことは、我々施設サービス従事者の願いでもありその支援は職務でもある。情報弱者である障害者・高齢者が、現代のあふれるばかりの情報の中から自分の望む情報やサービスを選び取るために、コンピュータやインターネットが活用できれば、これは有益な道具や武器となろう。現在、実際にはインターネット社会自体が情報未整理の状態であり、簡便に活用するまでには追いついていないという限界もあるが、今後数年後、ノーマライゼーション社会推進を考えると、あるいは障害者、高齢者にとっても常識的なツールになっているかもしれない。

障害者・高齢者が日常生活のなかで、どのようにコンピュータ利用を楽しむか。藤沢育成会CN委員会はこの視点からの事例をユニークに積み上げ始めている。次の項でそれら事例を紹介していきたいと思うが、ここで大切にしておきたいのが、「彼らの日常生活のなかでの」コンピュータあるいはネットワークの利用である。これまでのコンピュータ教育の流れ中には少なからず「指導対象としてのコンピュータ」視点が存在した。「CN委員会のモットーは、「コンピュータに慣れない職員が自分で勉強しなければならない立場から、苦虫つぶして利用者にコンピュータ操作を教える」構図であってはならない点にある。あくまでも生活を楽しむためのツールとしてのコンピュー

ター利用のあり方を追求していきたいと考えている。職員と利用者が昼休みにゲームを楽しみ、使いたいメンバー同士で使用方法の論争が自然に起きてくる背景を大切に思う。この感性を重視していきたい。この意味で、「職員の目を盗んで昼休みに使い出した」藤沢育成会の利用者メンバーの図太さと抜け目なさに拍手を送り、さらに、このような状況を生みだした施設環境や本来の援助姿勢と寛大な心理的余裕をもつ職員の方々からは、学ぶものが多いと考える。

#### 4. 知的障害者・高齢者のコンピュータおよびネットワーク利用の事例と今後の活動の方向

これまでにみてきたように本来は施設業務のツールとしてコンピュータネットワークを導入してきたのであるが、その経過のなかで期せずして、職員と施設利用者が共同してあるいは施設利用者自身が、ユニークな利用方法を探り出し、結果として障害者・高齢者それぞれ個人の社会参加やエンパワメントを生み出してきた。今後の活用を考える材料として以下にいくつかの事例を紹介する。

1) 地域活動センター「よし介工芸館」の活用事例：作業内容としての活用、および職員と利用者から出てきた「新規種購入」の要求

地域活動センター「よし介工芸館」では1台のMacが設置されている。ここでは利用者と職員が日常的に作業活動や余暇活動のなかで使っている。もともと各種ゲームやお絵かきソフトなど多数のプログラムをインストールしてあるので、多様な内容を楽しんできている。アトリエという場所では作業中に皆で絵の具などの材料を使って絵を描くのであるが、その時間にMacを使って順番に絵を描いている人たちもいる。Macで描かれた絵について今後どう展示・販売するかというようなきちんとした体制作りをしているわけではないが、皆が絵の具などの描画ツールと同様な感覚でちょこちょこ絵を描いて楽しんできた。

このような経過の中で「コンピュータが1台



では足りないね」という声か職員と利用者からともにも上がってきた。1台しかないコンピュータであり、職員の業務での使用に加えて、利用者の活用が頻繁にあったので、日常的には利用者同士でも取り合いになっている実態があった。施設利用者自身、不平不満が出せる人たちであるので、日頃から「もっと使いたい」「あの人がゲームを長く使っている」という訴えはよくあった。そこで今回新規機種購入の運びとなった。このため今回は利用者が最初から導入に関わることになっている。せっかくのいい機会であるので皆でこのプロセスを楽しもうとCN委員会メンバーや職員と利用者それぞれが協力し、機種のカatalogを取り寄せて色や機種など希望を出し合い皆で購入の検討を始めた。本活動センターではもともと利用者だけのディスカッションが盛んに行われてきているので、今回の購入議論はその実績が活用されているともいえる。この議論のプロセスをデジカメなどで記録している。今後、他の事業所の利用者からも同様な要望が起こってくるであろうと予想される。この時に購入のプロセスなどを紹介できるようにしたいと考えている。どのような意見があり、どのような決め方をしたかなどについて、ホームページ等に掲載し皆で共有し活用できれば、他の事業所の職員や施設利用者でさらに活発な自主的活動を生み出すのではないかと期待するからである。

## 2) 通所施設「湘南ゆうき村」の活用事例

### ①「デートのお誘い」をメールのやりとりで実現した施設利用者

更生通所施設の「湘南ゆうき村」を利用していた知的障害の女性がネットワークのユニークな使い方を生み出した。当時、彼女としてはあるスタッフと話をすることが大変な楽しみであった。しかし通所中の全ての時間にその職員と関わりを持つことができるわけではない。そこで彼女は話したいという思いをE-mailでスタッフに送っていた。彼女はその当時に初めてキーボードにさ

わったわけであるが、職員がそばで見守るなか、仮名入力一つひとつの文字を見ながら打ち込み、漢字変換も自分で行きメールを作成していた。本人とスタッフの間ではその後も2～3回のメールがやりとりされた。その間、彼女はスタッフからのメールをプリントアウトしうれしそうに自宅にもって帰るなどしていた。結果的に彼女の思いは実現されそのスタッフと十分な会話の時間をとることができた。地域生活で一般就労したいという希望を持っていた彼女にとっては、自分の淡い希望を自分の思いに沿って実現させた経験でもあった。人生の中でだれでも経験する「青春の今の時代」をまさに生きていたということでもある。その実現の裏側にネットワークがさりげなくあった。

このような施設利用者日常の利用に適宜アシスタントできたのは「湘南ゆうき村」での事前的なコンピュータ講習会が功を奏していたことになる。

「湘南ゆうき村」はその運営性格上、非常勤スタッフが多い。その当時すでに常勤スタッフはほとんどは仕事に利用できるほどのコンピュータ技術を習得していたが、その環境をみて非常勤スタッフからも利用したい旨の希望が出ていた。この希望に答える形で看護婦さんをはじめ主婦の方18人を対象に計4回ほどのレッスンを行っていた。会議室のような場所にMacを4台設置し講習会を進、さらに非常勤職員が日常的に使えるコンピュータを1台設置した。講習会は、夕方各自の仕事が終わってから2時間ぐらい実施した。常勤職員3人の手伝いを得て1人4回のレッスン(のべ8回)を行った。内容はマウスの操作方法やキーボードの入力方法から始まり、遊べるゲームやワープロ、インターネットのホームページ検索などであり、皆楽しみながら操作を学習していった。特に非常勤ではあったが看護職のスタッフは、その後自主的に習得し自分の業務(健診の表作成や文書、メールでの連絡など)に活用していった。

### ②職員とゲームを楽しんだ自閉症の青年の例

日常生活では人との関わりが極端に持ちにくい自閉症の青年が、昼休みお絵かきソフトを楽しん

だというエピソードがある。日頃は他者との接触を好まない彼であるが、この時は、職員2人が横に座りながら30分くらいを楽しんだ。一回だけではあったが彼の違った側面、あるいは潜在的な側面を垣間見る機会となった事例であった。

### ③「湘南ゆうき村デイサービス」における高齢者に対するパソコンボランティアの事例

：デイサービスの活動から自分の趣味としてコンピュータ利用が生活に取り込まれた例

「湘南ゆうき村」には、過去の一時期K大大学院のパソコンボランティアが4人入り、実際にコンピュータのセッティング等を手伝ってくれたことがある。この施設で行っているデイサービスは身体障害が対象であり車椅子の高齢者も利用している。ある時期の1週間、日中活動用のフロアに4台のMacを設置し施設利用者に利用してもらった。そのころちょうど利用者の中で温泉に行きたいという話しが盛り上がりホームページ検索で温泉の旅館を探すなどを楽しんだ。高齢者の方もインターネットという情報はよく知っていて関心は高かった。その経過の中、現在では2人ほど自宅でコンピュータを購入しインターネットを利用している。この時にも、K大のボランティアとデイサービスの担当職員が利用者の自宅に向き、プロバイダの選択や申請、初期設定などの相談や技術援助を行った。この利用者のうちの1人は、先に述べたデイサービスフロアでのコンピュータ経験から自宅での購入を希望するようになり、スタッフとカタログをいっしょにみたり見積もりをとったりしたものであり、購入後最初の3ヶ月は自分の機種を「湘南ゆうき村」のデイサービスフロアに置き、週2回のデイサービス時に自分のコンピュータを操作し「一人立ち」できるまで職員といっしょにレッスンした。ワープロで年賀状をつくったり趣味の将棋ソフトを使うなどして楽しみながら習得した。左上肢片麻痺がある方であったので、マウス操作を工夫する必要があった。マウスを逆につけ操作できるか試したり、あるいはローラーやスティック状のマウスなどデバ

イス2~3個を用意しどれが使いやすいかK大ボラと試みていた。その方は楽しみのためのコンピュータ操作自体がリハビリになるとともに、最新のソフトを求めてよくパソコンショップにでかけるなど町の中に自分で行くことが増えたという。職員との会話も新しいソフトを買ったなど話題が多彩になり、日常生活に張りがでてきたという。余暇の幅が広がった例である。

### 3) 授産施設「社会就労センターSEL P みらい社」の活用事例：

授産施設の「みらい社」では事務所においてあるコンピュータ（6台）を職員用として完全にネットワークを組んでいる。その中には多種のゲームがインストールされている。このため、昼休みに施設利用者3~4人がコンピュータに向かい、職員に対し「教えて」といつてくるのが日常的な光景となっている。時にデータの損失などのトラブルも生じているが職員のなかで対処している。また「みらい社」ではもともと自治会活動を盛んに行っており、自治会での議論のための資料なども施設利用者が作成することが、これまでもあった。ある利用者は自分の役割である自治会用プリントを事務所のコンピュータで作成した。操作がわからなくなると隣にいる職員の誰かに聞けば援助が受けられるので徐々にマスターしていった。

現在、「みらい社」の職員の間でも、利用者専用にもう一台欲しいという要望がでてきている。

（職員のお古でいいから」という声も聞くが、「施設運営費の本来の使用主体者は施設利用者である」ということを再認識したいところであるが）。先に述べた「地域活動センターよし介工芸館」での展開・討議プロセスを共有し、新規導入するからにはきちんと利用者に向き合って導入したいと考えている。

### 4) 入所更生施設「湘南セシリア」「湘南あおぞら」の活用事例

「湘南セシリア」も「湘南あおぞら」も入所施設であるがスタッフルームに数台のコンピュータが置いてある。スタッフルームも基本的には利用者の居住空間であると考え、日常的に利用者はスタッフルームに出入りしている。時には好みにコーヒーを飲んだり、あるいはスタッフルームのイスに座っていても当たり前というのが藤沢育成会の方針である。当然コンピューターも職員と利用者の共同利用が前提であり、利用者は空いているコンピューターを使ってゲームをしたりお絵かきソフトなどを楽しんでいる。その都度職員は適宜アシストしているが、ここであがるのがやはり「利用者用のコンピューターが欲しい」という声があがっている。職員といっしょに使いだした利用者との共存をどのように積極的に楽しめるかということが今後の課題となっている。

## 5. 今後の活用について考えること

以上のように、施設職務として導入したコンピューターネットワークを職員とともに施設利用者が使いだしたことにより、当初予想していなかったユニークな利用方法が生まれてきた。

知的障害者への情報提供という視点からは、日常生活において物理的に身近な場所にコンピュータがあること、および操作にとまどった時にいつでもどこでもアシストしてくれる人的環境があることが重要である。これが取りも直さず「障害者のアクセス権」を保障していることにつながる。藤沢育成会のコンピューターネットワークはこの一步を踏み出しあるいは期せずして貴重な実践を積み上げているのかもしれない。今後、どのような活用を発想していくのかについては、目の前の利用者とともに考えていくということがここにおいては自然な流れなのであろう。その中で、以下のような点について留意していきたいと考えている。

### ① 利用者主体は誰かという問題

コンピューター導入にあたってよく語られるのが「職員も使っていないのに（障害者にはもった

いない）」「職員の次でいい」という声である。施設サービスの主体は取りも直さず障害者・高齢者であり、コンピュータ活用にあっても主体は彼らであることを念頭におかなければならない。しかしながらそこにたどりつくまでのプロセスを考えると、まずクリアされなければならないのは、「援助者側で便利なツールとして、あるいは生活の楽しみとしてコンピューターが位置付いているか」という問題である。施設利用者が生活の中で適宜利用できるためには必ず人的環境としての職員のサポートが身近になければならない。この意味でも事務スタッフを始めに援助スタッフ、ボランティアなどのサポートする側がツールとしてあるいは楽しみを伝えるという感覚でコンピューターに向かえることが基盤整備となってくる。施設サービス利用者の有益な活用のためにも、「職員の次」ではなく「まず職員」という発想に転換していきたいところである。

### ② 発信する情報をだれがどのように使うかという問題

現在、藤沢育成のホームページは「For Stuff」となっている。実際にはこれから構築することが多い状態ではあるが、今後の運営について念頭にあるのが、先に述べたように法人の広報活動としてのホームページというよりはむしろまずスタッフ向けでありスタッフの業務ツールとしての利用とそのため環境整備である。「施設間でメールの配転送ができ、管理者同士のファイルの交換ができる」、この利便性を管理者やスタッフに経験してもらうことから始り、結果として、「地域生活支援センターばる」を中心とした「藤沢育成会ネットワーク」が地域への有益な情報発信源となり、かつ地域の人々との間で情報が共有できるようなシステムとなるようにしたいと考えている。

注1) 日本障害者協議会主催で実施した「パソコンボランティア・カンファレンス'99」(1999年3月6～7日)では、メインテーマを「情報バリアフリーの新世紀をむかえるた

めに」とし、記念シンポジウム等を開催した。

注2) 本論文で使用した図はすべて、藤沢育成会CN委員会メンバーが共同で作成した。

#### 参考文献)

愛知県人にやさしい情報提供検討委員会(1998):  
情報提供に関する一次報告書(行動提案)。

茨木 尚子(1998):バリアフリーのまちづくりー  
障害を持つ人のアクセス権の保障ー。社会福祉研  
究, 第70号。

もりすぐる(1996):「障害者」と街で出会ったら。  
緑風出版。